

はじめに

今日私たちが「読書」という時、思い浮かべるのはどのような行為だろうか。もちろん書物を読むことに違いない。しかし、「趣味は読書」という時、そこで想定されているのは教科書や実用書ではあるまい。一般的には小説や教養書の類、つまりは直接的に実際の役に立つわけではない本のはずである。考えてみれば、「趣味」という段階で実用のためのものではないことが前提となっている。「趣味は読書」という言い方が存在する段階で、すでに「読書」は実用的なものではなく、楽しみのためのものであることが共通認識になっているのである。

ではそうした「読書」の対象になっている書物とは、どのようにして作られ、読者のもとに届けられているのであろうか。制作主体はもちろん出版社であり、通常出版社は営利目的で、作者が書いたものを印刷・製本し、書店（インターネットを含む）を通して販売する。近年は電子書籍が増えているが、印刷・製本の過程が電子データの整備になっているだけで、事柄としては変わらない。作者は、売ることを目指して本を書く。もちろん作者・出版社ともに想定している読者は

特定の個人ではなく、不特定多数の購買者である。

これらは、今日では当たり前のことで、私たちは何ら意識することなくそうした読書行為を行っている。しかし、かつてはそれは決して当たり前のことではなかつた。

現在でも中国語で「読書」といえば、基本的には勉強することである。これは、元来「書を読む」という行為が勉強のためのものだつたことを示している。実際、中国では書物を「四部」に分類してきたが、その内訳は「經史子集」^{けいししじゅう}、即ち儒教の經典・歴史書・思想書及び実用書・詩文集であつた。つまり、小説のような娯楽書は元來書物の中には入つていなかつた、というよりそした書物 자체ほとんど存在しなかつたのである。

しかも、書物の中で用いられていた言語も、人々が日常用いていたものとは全く異なつていた。このことは、今日の日本において、漢文と中国語があたかも別のものであるかのように扱われていることからも明らかであろう。たとえば二人称は、漢文では「汝」などであるのに対し、中国語では「你」である。しかし漢文も古典中国語であつて、両者は別の言語というわけではない。

漢文は、中国では「文言」と総称される古典的な書き言葉により書かれており、紀元前後四百年ほどにわたつて存在した漢の時代の語彙を基本とする。時代を追うごとに言語は変化するものであり、当然のことながら、七世紀に成立した唐の時代にはすでに日常用いる語彙は文言とは大きく異なるものになつていた。その差は時代を追うごとに広がつていくのだが、しかしそれにも

かわらず、書き言葉としては文言が使用され続ける。つまり、「経史子集」の書物は基本的にすべて文言で書かれている。従つて、文言を読む教育を受けていない人間には、その内容を理解することは困難になる。これでは不特定多数の人間が書物を読むという状況 자체存在しうるはずもない。

これは中国特有の現象ではない。たとえば、西欧においては書き言葉として、すでに存在しないローマ帝国の言語であるラテン語が長きにわたつて使用されていた。この状態は、後のイタリア語の基本となるトスカーナ語で詩作したダンテなどの先駆的試みを経て、宗教改革におけるルターによるドイツ語訳聖書が、折しも実用化された活版印刷により爆発的に広がつたことを契機に崩れることになる。

日本では、公式の書き言葉は漢文、つまり中国語であった。これは江戸時代に至るまで継続するが、一方でその過程で漢字を表音文字として使用することから平仮名・片仮名が発生し、平安時代には話し言葉を平仮名で文字化するかな文が出現する。しかし、『源氏物語』などによつてこの時期のかな文が古典化されると、かな文もそのまま平安時代の語彙を使用するという形で固定することになる。一般の実用文としては、漢文訓読にかな文の要素をまじえたいわゆる和漢混淆文が主に用いられるが、いずれにせよ室町時代以降の書き言葉は、当時の人々が日常用いている言語とはかけ離れたものであった。この状況が変わるのは、明治の言文一致を待たねばならぬい。

このように、書き言葉と話し言葉が大きくかけ離れるという現象は、世界各地で広く認められるものである。これは、書かれた言葉というものが権威を持つこと、そしてそれらを操る人々が強いエリート意識を持ち、自分たちのアイデンティティを保証するものとして権威化した言語を保持し続けたことに由来するものであろう。無論、たとえばヨーロッパにおいて、国籍を異にする人々であってもラテン語で会話ができたように、あるいは東アジアにおいて、文言を介して文字の形で諸国間の意思疎通が可能であったように、こうしたエリート間の共通言語の存在には一定のメリットが存在した。しかし一方で、このためエリート以外の人々が「読書」から排除されていたことは紛れもない事実である。

では今日私たちが楽しんでいる「読書」は、いつ始まったのか。不特定多数の読者が対象となる以上、そこで前提となるのは書籍の大量複製と、教養が高くない人間でも読解可能な言語の存在である。大量複製のために欠かせない紙と印刷術は、ほかならぬ中国において、他の地域よりも最も早い時期に具わっていたことになる。では言語の面はどうであろうか。話し言葉の語彙を用いた、エリート以外でも読んで理解できる書き言葉（「白話」と呼ばれる）が本格的に出現するのは、印刷術の成立からは大きく遅れて、元・明期のことになる。この時期こそ、本書がこれから論じていく対象になる。

本書は、安藤信廣氏の『中国文学の歴史 古代から唐宋まで』の後を承ける形で、それに続く

時期の文学について論じるものである。ただ本書の内容は、安藤氏の前著とは異なる視点に基づくものになる。唐宋の文学作品は、ほとんどが文言で記されたものであり、安藤氏の前著は当然ながら、知的エリートによる作品を中心として記述されている（無論「宋代の小説」の項などで、非エリートを対象とする文学についても適切な目配りはなされている）。一方、本書においては、白話を用いた文學がいかにして出現し、展開していくかを中心に迫っていくことになる。それは、今日の「読書」がどのようにして生まれ、育まれていったかを追体験することにもなるであろう。

従つて本書においては、元・明・清における伝統詩文には、必要な場合以外深くふれることはしない。かつて吉川幸次郎氏は、「この時期においても、文学の中心として意識され、したがつてもつとも真剣な感情表現の場となつたのは、依然として詩及び非虚構の散文であった。ことに詩である。戯曲と小説は、「文学革命」までは、意識され、真剣な気持ちで書かれることは、むしろ稀であった」、「元以後の文学の研究においても、まず重視すべきは、詩である」と述べた（『元明詩概説』（岩波書店一九六三））。この言葉は確かに正しい。ただし、それは當時の士大夫したいぶ、つまりエリートの視点から「文学」をとらえる限りにおいてである。エリート以外の人々が文字の表面に出現するこの時期、どのようにして多くの人々が文学を楽しむようになってきたかを追つていくことは、文学とは何かについて再考する上で重要な意味を持つであろう。「近代」をもたらした重要な契機が、非エリートが書物を読むことについたことを思えば、それは私たちが生きる現在を問い合わせることにもつながり、また「読書」という行為が今日私たちに

かくも深い喜びを与えてくれることを思えば、私たち一人一人にとつても、それは大切な意味を持つに違ひない。